

## 日本語方言の名詞修飾構造とその周辺

佐々木冠（札幌学院大学）

### 概要

本発表では日本語方言の名詞修飾構造の多様性を概観するとともに文の名詞性に関わる問題を検証する。前半では連体修飾格助詞と準体助詞の多様性および終止・連体合流の多様性を取り上げる。後半では、茨城県神栖市波崎の方言データをもとに拡張コピュラ構文（いわゆるノダ文）で準体助詞が用いられない方言に関して提案されている動名詞分析を検証する。

### 1. はじめに

#### 用語

終止・連体形：主節の述語（かかり結びを除く）と連体修飾節の述語になり得る形式を終止・連体形と呼ぶことにする（引用部分は除く）。

拡張コピュラ構文：標準語のノダ文と方言の対応する構文を拡張コピュラ構文と呼ぶことにする。益岡(2015)の名称を採用。「ノ」が現れない方言の構造もカバーできる用語。

金水・高山・衣畑・岡崎 (2011: 97)

終止形・連体形の合流とは、15世紀までに中央の音声言語に起こった現象で、あらゆる活用語において終止形がほぼ消滅し、連体形が従来の用法に加えて主文の終止用法を終止形から奪い取った現象である。「の」「が」による主格表示を許さなかった終止形句が消滅し、そこに連体形句が置き換わったことによって、「が」が主文終止に進出したと考えるもので、大変魅力的な仮説であると言える。

→有標な主格は連体修飾節の主語の形式を継承したもの。

→では、終止・連体形は連体形の機能を（どの程度）継承しているのか？

→連体修飾の機能だけでなく名詞形成機能も継承しているとする説（動名詞説、後述）。

考えなければならないこと

- ・ 終止形と連体形が（大部分の活用語で）合流した方言でも主語がゼロ格表示の方言は存在する（上記文献でも指摘あり）。→2節
- ・ 終止形と連体形の合流のあり方の多様性。→2節
- ・ 準体助詞の分布の多様性。→3節以降

### 2. 連体形と終止形の合流の地域差

(i) 連体形と終止形の対立が全ての用言で存在する体系：琉球語、八丈方言

(ii) 動詞と形容詞で連体形と終止形が合流し、形容動詞とコピュラで対立が残存する体系：中央方言を含む多くの本土方言

(iii) すべての用言で連体形と終止形が合流した体系↓

以下のデータは工藤(2004)より。

(1) 形容動詞における終止形と連体形の地域差

C1：「太郎は元気だ」「元気な人」

C2：宇和島方言：「太郎元気な」「元気な人」

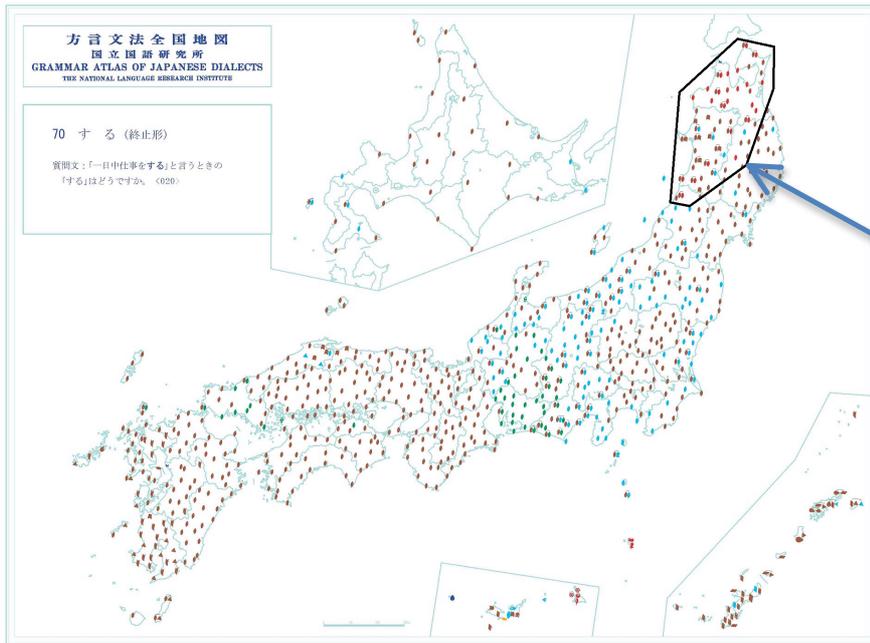
青森県諸方言：「太郎元気だ」「元気だ人」

\*) 「C」は形容詞と形容動詞の区別がはっきりしている方言。

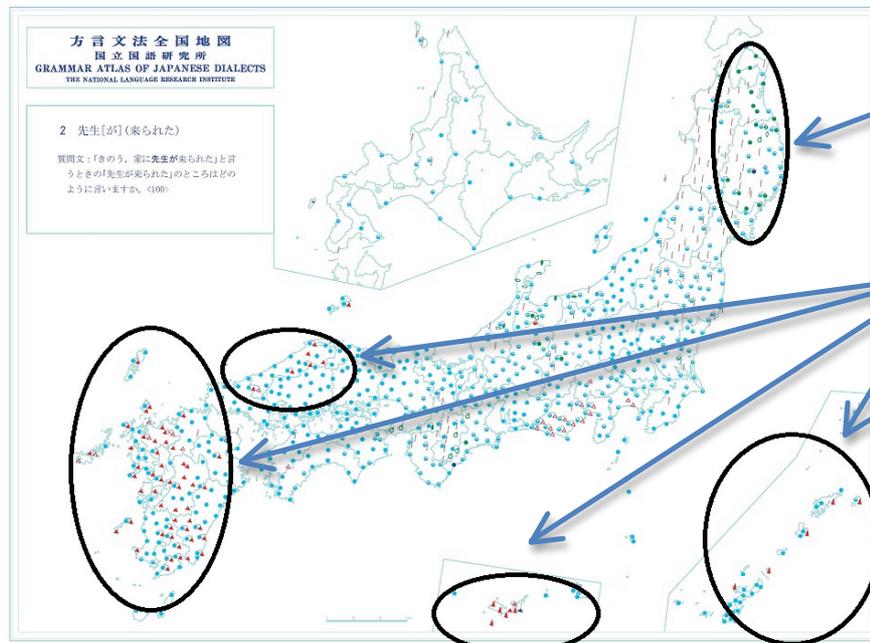
(2) コピュラに連体形と終止形の区別がない方言

青森県深浦方言：「オヤグ（親戚）ダ人」





サ変動詞の終止形「す」が残存する地域



主節の主語がゼロ格表示の地域

主節の主語が「の」に類する格助詞で表示される地域

『方言文法全国地図』より

サ変動詞に終止形が残存し、形容動詞における連体形と終止形の合流が連体形の消失というかたちをとった地域（北東北）は、終止形残存の傾向が強い地域と言える。その地域で主語のゼロ格表示が見られることは、終止形の消失によって連体形と終止形の合流が起こった地域（本土方言の大部分）の変化のネガと捉えることができる。なお、『方言文法全国地図』には反映されていないが、主語のゼロ格表示は関東地方でも広く見られる現象である。そこでは、サ変動詞やカ変動詞の終止形が「べし」に由来する接尾辞のホストとして機能する被覆形のかたちで残存している（su-bee 「するだろう」、ku-bee 「来るだろう」）。

### 連体形と終止形の合流が動詞の形態法に何をもたらしたのか

小松(1999: 170-171)

どのように表現しようと、終止形／連体形が合流した事実が動くことはない。しかし、繰り返し述べてきたように、終止形は活用の基幹形であるから、この変化の結果、基幹形が連体形に吸収されて姿を消したとすれば、日本語の活用体系が根底から崩壊したことになるが、そういう破壊的な変化が生じるはずはない。基幹形は活用語を支える基幹であるから、基幹形なしに活用語は存在できない。したがっ

て、残存した語形が基幹形である。

残存したのはそれまで連体形として使用されていた語形であるから、それが、新しい基幹形、すなわち、新しい終止形である。したがって、終止形が連体形を吸収し、それまでの連体形の語形をとったと考えるべきであって、終止形が連体形に吸収されたとか、終止形が連体形に合流したとかいう変化ではあり得ない。

表 1. 古典語の連体形・終止形と現代語（標準語）の終止・連体形

	古典語	現代語（標準語）
連体修飾を明示する機能	連体形	終止・連体形、連体形（コンピュータ）
用言を名詞化する機能	連体形	準体助詞ノ
主節の述語になる機能	終止形、連体形（係り結び）	終止・連体形

終止・連体形が格助詞やコンピュータの直前に来ることができる方言（中部、関東の一部）

Onishi (2012: 250)

From the perspective of standard Japanese, it seems that these examples of dialects show the dropping of *no* (Kokuritsu Kokugo Kenkyuusho 2004, p.145), but such an assessment is inaccurate. In fact, the examples show that the noun-forming function of the predicate survives in certain predicative words, with some variation occurring in regional dialects. (下線は佐々木によるもの)

(同じページで動名詞(*gerund*)を下記のように定義)

Gerunds are verbs, adjectives, adjectival nouns, and noun predicatives that compose noun phrases without accompanying noun-phrasing markers such as the postposition *no* and the functional noun *koto*.

Onishi (2012) : 終止・連体形の一用法としての動名詞分析

準体助詞なしで、終止・連体形が格助詞に前節できる方言では、連体形の名詞形成機能が残っているとし、格助詞やコンピュータの前のような通常名詞が来る位置に現れる終止・連体形を動名詞 (*gerund*) と見なす分析を提唱。

(3) 山梨県塩山市方言 (Onishi 2012、形態素分割とグロスと訳は引用元のまま)

*sore-ga kome-o hiku-ga erai-da-yo*  
he-SUB rice-OBJ grind-SUB difficult-COP-POS  
"It is difficult to grind rice for him."

\*) 主格助詞とコンピュータの前に準体助詞がない。

柴谷(2010)

終止・連体形の合一による従属節と独立文の区別の喪失を補うものとして準体助詞が発達したとする従来の説の問題点として、終止・連体形の合一が生じている方言の中に準体助詞の義務性に関して多様性があることを指摘。

問題：標準語で準体助詞が現れる環境で準体助詞が現れない構造に現れる終止・連体形が名詞相当の要素（動名詞など）になっていると分析することは常に有効か？

- ・ 標準語で準体助詞や補文化辞の「の」が現れる位置が一律ゼロになる方言だけではない。
- ・ 方言によっては、特定の「の」はゼロになるが、他の「の」は義務的に出現しなければならない場合がある。
- ・ 茨城県神栖市波崎の方言はそのような方言である。
- ・ 波崎方言のデータをもとに動名詞分析の妥当性を検証。

### 3. ノダ文の地域差

#### 人魚構文としてのノダ文

##### 標準語のノダ文

- ・ 準体助詞ノの前に形容動詞やコンピュータが来る際に連体形になる点で、構文の前半部分が連体修飾構造のように見える。(角田 1996, Tsunoda 2013)

\*) 名詞述語の場合にコンピュータが連体のノにならないのは「のの」という連続を避けるためか。

(4) お祖父さんは 70 歳になっても元気なのだ。(＊元気なのだ)

(5) 人生は旅なのだ。(＊旅なのだ、＊旅だのだ)

- ・ 補文の主語に対応する要素に主格・属格交替を許さない点では、非連体修飾的である。
- (6) 通常の連体修飾節では（述語の位置にあると）主格・属格交替が可能。  
これは、さんま {が・の} 焼ける匂いだ。
- (7) \*お祖父さんの 70 歳になっても元気なのだ。
- (8) \*人生の旅なのだ。

#### 拡張コピュラ構文でノが現れない方言

- ・ ノダ文に相当する構文の述部に準体助詞ノが存在しない方言が、中部地方から関東にかけて分布している。
- (9) 長野県高遠町(Onishi 2012、標記も引用もとを反映)  
Sonna zidai-mo   atta da  
such era-POS   exit-PAST COP
- (10) 茨城県神栖市波崎方言  
asogo=wa           sizuga=da=da=jo  
there=TOP         quiet=COP.NPST=COP.NPST=SFP  
「あそこは静かなのだ」

#### 4.1. 茨城県神栖市波崎方言の概要

茨城県神栖市波崎方言の文法的特徴（詳細は佐々木 2013 を参照）。

音韻：5 母音体系、前鼻音子音の欠如（阻害音の対立は有声対無声）、「肩」は[kada]、「わかる」は[wagaruu]、無声化なし（「座布団」は[dzabutoN]であって、[\*dzaputoN]ではない）。無声化がないことを除けば茨城県内の他の地域の方言と同じ。

格体系：連体でガ・ノの対立、主格ガ、対格バ（またはゼロ）、経験者格ガニ、方向格サ

用言の形態法：サ変動詞の一段化傾向（/do: si-ru=da/ [do:eitta] 「どうするのだ」、siroba 「すれば」）など

→茨城的な音韻論、千葉的な述語形態論、利根川流域に見られる格体系

- (11) ore=ba           tsure-det-te           kure=jo  
1sg=ACC           take-GER.go-GER       give.IMP=SFP  
「私を連れて行ってください」  
Cf. tsugue tadag-u-na  
「机をたたくな」
- (12) dogo=sa           ig-u  
where=ALL         go-NPST  
「どこに行く？」
- (13) on=ni           kure=jo  
1sg=DAT         give.IMP=SFP  
「私にくれよ」
- (14) warra=hanja       wagam-me  
2pl=EXP.TOP       understand-may.not  
「あなたたちにはわからないだろう」

#### 5. 波崎方言における典型的な連体修飾構造

・ [NP=GEN N]<sub>NP</sub> におけるガ・ノ対立

- (15) [ore=ŋa           mono]<sub>NP</sub>  
1sg=POSS           thing  
「私のもの」
- (16) [burokku=no   ue]<sub>NP</sub>=sa   tskamat-te  
brick=GEN   above=ALL   hold-GER  
「ブロックの上につかまって」
- (17) [huroba=no       mizu]<sub>NP</sub>  
bath.room=GEN   water  
「風呂場の水」
- (18) [mae=no           uzi]<sub>NP</sub>  
front=GEN       house  
「前のうち」

表 2. 主格と属格

	有生	無生
主格	=ŋa	=ŋa
属格	=ŋa	=no

・被修飾名詞の前の動詞・形容詞は終止・連体形、形容動詞とコピュラは連体形

動詞：終止・連体形

(19) *dogo=sa=mo* [*nije-ru* *dogo*]<sub>NP</sub> *na-i=da=gara*  
 where=ALL=also escape-NPST place not.exist-NPST=COP.NPST=because  
 「どこにも逃げるところがないのだから」

(20) [*ko:zi* *jat-te-ru* *togo*]<sub>NP</sub>=*made*  
 construction.ACC do-GER.be-NPST place=up.to  
 「工事をやっているところまで」

形容詞：終止・連体形

(21) [*sugo-i* *name*]<sub>NP</sub>=*de* *kj-ta=da=tte=jo*  
 terrible-NPST wave=COP.ADV come-PST=COP.NPST=QUOT=SEFP  
 「すごい波 (の状態) で来たんだってよ」

(22) [*okkana-i* *omoi*]<sub>NP</sub>  
 fearful-NPST feeling  
 「怖い思い」

形容動詞：連体形

(23) [*sizuga={na/\*da}* *basjo*]<sub>NP</sub>  
 quiet={COP.ADN/\*COP.NPST} place  
 「静かな場所」

Cf. *sizuga=da*  
 quiet=COP.NPST  
 「静かだ」

コピュラ：連体形 (ノ)

(24) [*jasumi={no/\*da}* *hi*]<sub>NP</sub>  
 holiday={COP.ADN/\*COP.NPST} day  
 「休みの日」

Cf. *jasumi=da*  
 holiday=COP.NPST  
 「休みだ」

・主要部と連体修飾節の間に「の」が入れられないこと

(25) *ido:-saN=ηa* *aje-da* (*\*no*) *mozi*  
 Ito-Ms=NOM fry-PST (*\*NMLZ*) mochi  
 「伊藤さんが揚げた餅」

## 6. 語彙的名詞以外の要素が非修飾部にある連体修飾構造

・[NP=GEN {NMLZ/∅}]<sub>NP</sub> (名詞句全体の指示物はもの) →準体助詞は随意的。

(26) *ore=ηa(=n)=da*  
 1sg=POSS(=NMLZ)=COP.NPST  
 「私のだ」

・[[+V] {NMLZ/\*∅}]<sub>NP</sub> (名詞句全体の指示物はもの) →準体助詞ノが必要

動詞：終止・連体形

(27) *sogo=ni* *aN={no/\*∅}=wa* *nani=ga*.  
 there=DAT exist.NPST={NMLZ/\*∅}=TOP what=Q  
 「そこにあるのは何か？」

形容詞：終止・連体形

(28) *izibaN* *taga-i={no/\*∅}=ηa* *ko:sinsama*  
 most high-NPST={NMLZ//∅}=NOM Koshinsama  
 「一番高いのが庚申様」

形容動詞：連体形

(29) *hasi=midai=na={no/\*∅}* *at-ta=n=zja* *na-i=ga*  
 bridge=like=COP.ADN={NMLZ/\*∅} exist-PST=NMLZ=COP.ADV.TOP not.exist-NPST=Q  
 「橋のようなのがあったのではないか」

(30) 波崎方言の連体修飾構造：[...] {N/NMLZ}

- 被修飾要素がゼロの構造は[...]に連体修飾格名詞句が来る場合に随意的にだけ可能。
- [...]の述部が動詞、形容詞の場合は終止・連体形をとる。
- [...]の述部が形容動詞、名詞述語の場合は連体形をとる。

表 3. 波崎方言の用言における連体と終止の対立

	連体形	終止形
動詞	kag-u 「書く」	
形容詞	oso-i 「遅い」	
形容動詞	sizuga=na 「静かな」	sizuga=da 「静かだ」
コピュラ	jasumi=no 「休みの」	jasumi=da

通常の連体修飾節におけるガ・ノ交替

- (31) *eda={na/no} ore-da sagura*  
branch={NOM/GEN} break-PST cherry.tree  
「枝 {が・の} 折れた桜」

・主格・属格交替が形式的に確認できるのは無生物名詞が主語の場合だけ（表2参照）。

## 7. 波崎方言の拡張コピュラ構文

・標準語のノダ文（拡張コピュラ構文）に相当する構文の述部にはノは不要。埋め込まれた文の述語の直後にコピュラが来る。形容動詞と名詞述語が内側に埋め込まれた場合、連体形ではなく終止形になる点に注意。

- (32) *das-u=da* 「出すのだ」 (動詞+コピュラ)  
put.out-NPST=COP.NPST  
(33) *tagai=da* 「高いのだ」 (形容詞+コピュラ)  
high=COP.NPST  
(34) *sizuga=da=da* 「静かなのだ」 (形容動詞+コピュラ)  
quiet=COP.NPST=COP.NPST  
(35) *jasumi=da=da* 「休みなのだ」 (コピュラ+コピュラ)  
holiday=COP.NPST=COP.NPST

自然談話からの例

- (36) *asogo=wa sizuga=da=da=jo*  
there=TOP quiet=COP.NPST=COP.NPST=SFP  
「あそこは静かなんだよ」  
(37) *tsunami=te ju: mono=wa attoju:ma=da=dap-pe=jo=na*  
tsunami=QUOT say.NPST thing=TOP instant=COP.NPST=COP.NPST-may=SFP=SFP  
「津波っていうものはあつという間なのだろうよな」  
(38) *sjo:ro=na tore-da=no=wa hasagi=no*  
truffle=NOM harvest(intr)-PST=NMLZ=TOP Hasaki=GEN  
*jama=da=da=gedo=mo*  
copse=COP.NPST=COP.NPST=but=also  
「松露が採れたのは波崎の平地林なのだけれども」

拡張コピュラ構文（標準語のノダ文）は人魚構文（角田 1996）の一種と考えられる。拡張コピュラ構文で内側の形容動詞とコピュラは終止形であったが、外側のコピュラの前に名詞が来るタイプの拡張コピュラ構文では内側の形容動詞とコピュラは連体形をとる。

- (39) *asjta=wa jasumi={no/\*da} hazu=da* (埋め込み文の述部は連体形)  
tomorrow=TOP holiday={COP.ADN/\*COP.NPST} realization=COP.NPST  
「明日は休みのはずだ」  
(40) *asjta=wa sizuga={na/\*da} hazu=da* (埋め込み文の述部は連体形)  
tomorrow=TOP quiet={COP.ADN/\*COP.NPST} realization=COP.NPST  
「明日は静かなはずだ」

標準語の人魚構文に対応する構文における述部の多様性

- (41) 拡張コピュラ構文： ... {+V]-終止・連体形 / {形容名詞/名詞}=終止形}=da  
その他の人魚構文： ... {+V]-終止・連体形 / {形容名詞/名詞}=連体形}=名詞=da

複合述部における名詞の有無によって内側の名詞の形態が左右される。

## 8. 標準語の「述語+の」に対応するその他の構造

補文化辞の「の」は省略できない。

- (42) *sado:-san=na ku-N={no/\*Ø}=na oso-i.*  
Sato-Ms=NOM come-NPST={NMLZ/\*Ø} late-NPST  
「佐藤さんが来るのが遅い」  
(43) *kaminari={na/\*no} okkot-ta={no/\*Ø} sit-te-ru=ga.*  
thunder={NOM/\*GEN} fall-PST={NMLZ/\*Ø}.ACC know-GER.be-NPST=Q  
「雷が落ちたのを知っているか」  
(44) *kaminari={na/\*no} nat-ta={no/\*Ø} ki:-da=ga.* (U11)を参照。  
thunder={NOM/\*GEN} sound-PST={NMLZ/\*Ø}.ACC hear-PST=Q  
「雷が鳴ったのを聞いたか」

分裂文における補文化辞「の」も省略できない。

(45) *taro:=ŋa kut-ta={no/\*Ø}=wa riŋŋo=da*  
Taro=NOM eat-PST={NMLZ/\*Ø}=TOP apple=COP.NPST  
「太郎が食べたのはリンゴだ」

(46) *taro:=ŋa kare: kut-ta={no/\*Ø}=wa hasi=de=da*  
Taro=NOM curry.ACC eat-PST={NMLZ/\*Ø}=TOP chopsticks=INST=COP.NPST  
「太郎がカレーを食べたのは箸でだ」

接続助詞の一部として使われる「の」も削除不可能

(47) *hadage=ni ue-da={no/\*Ø}=ni sodada-ne*  
field=DAT plant-PST={NMLZ/\*Ø}=DAT grow.IRR=NEG.NPST  
「畑に植えたのに育たない」

接続助詞の一部として使われる「の」の前のコピュラと形容動詞は終止形（連体形ではない）

(48) *joru=da=no=ni urusa-i.*  
night=COP.NPST=NMLZ=DAT noisy-NPST  
「夜なのにうるさい」

(49) *siŋodo=ŋa te:heN=da=no=ni kjaŋu=ŋa kj-ta*  
work=NOM hard=COP.NPST=NMLZ=DAT guest=NOM come-PST  
「仕事が大変なのに客が来た」

- ・ (48)-(49)の例文のノに NMLZ というグロスを付けたが、実際には文を名詞化していない。
- ・ =no=ni は二つの文をつなげているが、それは、述語と項の関係ではない。ノニに先行する部分は後続する部分に対して逆接の副詞節として機能している。
- ・ 非連体修飾の構造の述部は、形容動詞やコピュラの場合でも連体形にならない。
- ・ 標準語ではこうした構造でも形容動詞とコピュラは連体形になる。
- ・ 形容動詞や名詞述語が連体形にならない拡張コピュラ構文（波崎方言）は連体修飾構造を持つといえるか？

## 9. 考察

- ・ コピュラのホストに関する選択制限の緩和

統語素性による品詞の分類（Chomsky 1970, Jackendoff 1977）

N=[+N, -V]

A=[+N, +V]

V=[-N, +V]

P=[-N, -V]

(50) ノダ方言：\*[+V]=COP (N ([+N, -V])と P([-N, -V])は OK。(45)と(46)の訳文を参照。)

(51) 波崎方言：N, A, V, P すべて OK。\*[+V]=COP は文法に関与しないほど低い位置づけになっているものと考えられる。

P が先行する構造（分裂文の例(46)も参照）

(52) *are=gara dap-pe=jo*  
that=ABL COP.NPST-may=SFP  
「あれからだろうよ」

- ・ この方言の拡張コピュラ構文は連体的ではない（内側の述語がすべての品詞で終止形）。
- ・ したがって、動名詞分析が当てはまらない可能性が大。

・ どのような構造と分析すべきか → コピュラの助動詞用法

終止形をとる助動詞的な接尾辞の存在

す-べき（茨城では su-be: ~ su-p-pe /su-ru-be/）

す-まい（ただし、終止・連体形接続も。「する-まい」）

上記と並行的な構造

波崎方言の連体形と準体助詞に関して、

- ・ 波崎方言では、修飾する名詞および準体助詞が存在する構造以外では連体形が使えない。
- ・ ノが準体助詞として機能する範囲が標準語よりも狭い（複合接続助詞への文法化が進行している）。

という一般化が成立する。

波崎方言は形容動詞とコピュラ以外の用言で連体形と終止形が合流している。合流しているカテゴリーでは、形式的には連体形が残った（終止形は独立性を失い、被覆形になった）。形容動詞とコピュラには形式的に連体形と終止形の対立が存在するが、連体形の機能は古典語の連体形のそれと同じではない。名詞化の機能は失われている。連体修飾の機能だけが残っている。波崎方言の連体形は形容詞的な機能は持っているが、名詞的な機能は持っていない。中国・四国地方の方言や北東北の方言のデータから明らかなように、（終止形と形式的に区別される）連体形が存在しなくとも述語が連体修飾機能を担うことは可能である。柴谷(2010)のように、連体修飾の本質を名詞（化された節）と名詞の同格関係と捉えるならば、連体形が名詞化の機能を失った方言は、（形式的に連体形が部分的に残っていても）連体形の機能が失われた方言と言えるのではないだろうか。「終止形が連体形を吸収し、それまでの連体形の語形をとった」（小松 1999）という分析がこのようなタイプの方言にはふさわしいものと考えられる。

#### 参考文献

- Chomsky, Noam (1970) Remarks on Nominalization. In: Roderick Jacobs & Peter Rosenbaum (eds.), *Readings in English Transformational Grammar*. 184-221. Waltham, MA: Ginn.
- Jackendoff, Ray (1977) *X<sup>0</sup> Syntax*. Cambridge: MIT Press.
- 金水敏・高山善行・衣畑智秀・岡崎友子(2011)『シリーズ日本語史3 文法史』岩波書店.
- 小松英雄(1999)『日本語はなぜ変化するか』笠間書院.
- 工藤真由美(2004)「調査と研究成果の概要」『日本語形容詞の文法』工藤真由美編. 6-52. ひつじ書房.
- 益岡隆志(2015)「拡張コピュラ構文の意味分析」『言語研究の視座』深田智・西田光一・田村敏広編. 19-34. 開拓社.
- Onishi, Takuichiro (2012) Gerund in Japanese dialects: Forms and geographical distributions. In: *Papers from the First International Conference on Asian Geolinguistics*. 249-260. Aoyama Gakuin University.
- 佐々木冠(2013)「茨城県神栖市波崎」『平成 24(2012)年度 文化庁委託事業報告書 東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究（茨城県）』杉本妙子編. 319-384. 茨城大学.
- 柴谷方良(2010)「理論研究と方言研究をつなぐもの：準体助詞の機能と展開」国立国語研究所での発表（2010年3月19日）.
- 角田太作(1996)「体言締め文」『日本語文法の諸問題』鈴木泰・角田太作編. 139-161. ひつじ書房.
- Tsunoda, Tasaku (2013) *Adnominal Clauses and the 'Mermaid Construction': Grammaticalization of Nouns*. Tokyo: NINJAL.

#### 付記：上田の方言

長野県上田市の方言は、述部に「ノ」がない拡張コピュラ構文があることと複合接続助詞の一部を構成するノの前にコピュラの終止形が来る点で、波崎方言と共通の特徴を示す。以下のデータは同市出身の白石英才氏によって提供されたもの。

#### ・形容動詞とコピュラに連体形と終止形の区別がある。

- (U1) *koko=wa sizuka=da*  
here=TOP quiet=COP.NPST  
「ここは静かだ」
- (U2) *sizuka=na basjo*  
quiet=COP.ADN place  
「静かな場所」
- (U3) *asita=wa jasumi=da.*  
tomorrow=TOP holiday=COP.NPST  
「明日は休みだ」
- (U4) *jasumi=no hi*  
holiday=GEN day  
「休みの日」

#### ・拡張コピュラ構文

- (U5) *aitsu genki=da=da*  
that guy.NOM health=COP.NPST=COP.NPST  
「あいつ、元気だよ」
- (U6) *huzisaN are=da=da*  
Mt. Fuji.NOM that=COP.NPST=COP.NPST  
「富士山、あれだよ」

ただし、主格・属格交替の範囲は波崎方言と同じではない。

・連体修飾構造（主格・属格交替可能）

(U7) *eda={ga/no} ore-ta sakura*  
branch={NOM/GEN} break-PST cherry.tree  
「枝 {が・の} 折れた桜」

(U8) *ito:-san={ga/no} age-ta=no=ga uma-i*  
Ito-Ms={NOM/GEN} fry-PST=NMLZ=NOM delicious-NPST  
「伊藤さん {が・の} 揚げたのがうまい」

\*) (U8)は波崎方言では容認されない。連体修飾格において有生性が格を左右するか否かの違い。

・人魚構文：名詞が述部に含まれる場合は内側の名詞述語と形容動詞が連体形

(U9) *asita=wa jasumi={no/\*da?} hazu=da*  
tomorrow=TOP holiday={COP.ADN/\*COP.NPST} realization=COP.NPST  
「明日は休みのはずだ」

(U10) *asita=wa/ sizuka={na/\*da} hazu=da*  
tomorrow=TOP quiet={COP.ADN/\*COP.NPST} realization=COP.NPST  
「明日は静かなはずだ」

・補文化辞で導かれる構造（知覚動詞が主節動詞、主格・属格交替可能）

(U11) *kaminari={ga/no} nat-ta=no sit-te-ru=da*  
thunder={NOM/GEN} sound-PST=NMLZ know-GER.be-NPST=COP.NPST  
「雷 {が・の} 鳴ったのを知っているよ」

\*) 上は波崎方言では容認されない。

・副詞節（主格・属格交替可能）

(U12) *ame={Ø/no} jam-u=made taro:=wa ie=ni i-ta*  
rain={NOM/GEN} stop-NPST=up.to Taro=TOP house=DAT stay-PST  
「雨 {が・の} 止むまで太郎は家にいた」

\*) 上は波崎方言では容認されない。

・分裂文（主格・属格交替不可能）

(U13) *ozisan={ga/\*no} kare:=o tabe-ta=no=wa*  
uncle={NOM/\*GEN} curry=ACC eat-PST=NMLZ=TOP  
*hasi=de=da=da*  
chopsticks=INST=COP.NPST=COP.NPST  
「おじさんがカレーを食べたのは箸でだよ」

・接続助詞を構成するノの前に終止形のコピュラ

(U14) *joru=da=no=ni urusa-i*  
night=COP.NPST=NMLZ=DAT noisy-NPST  
「夜なのうるさい」